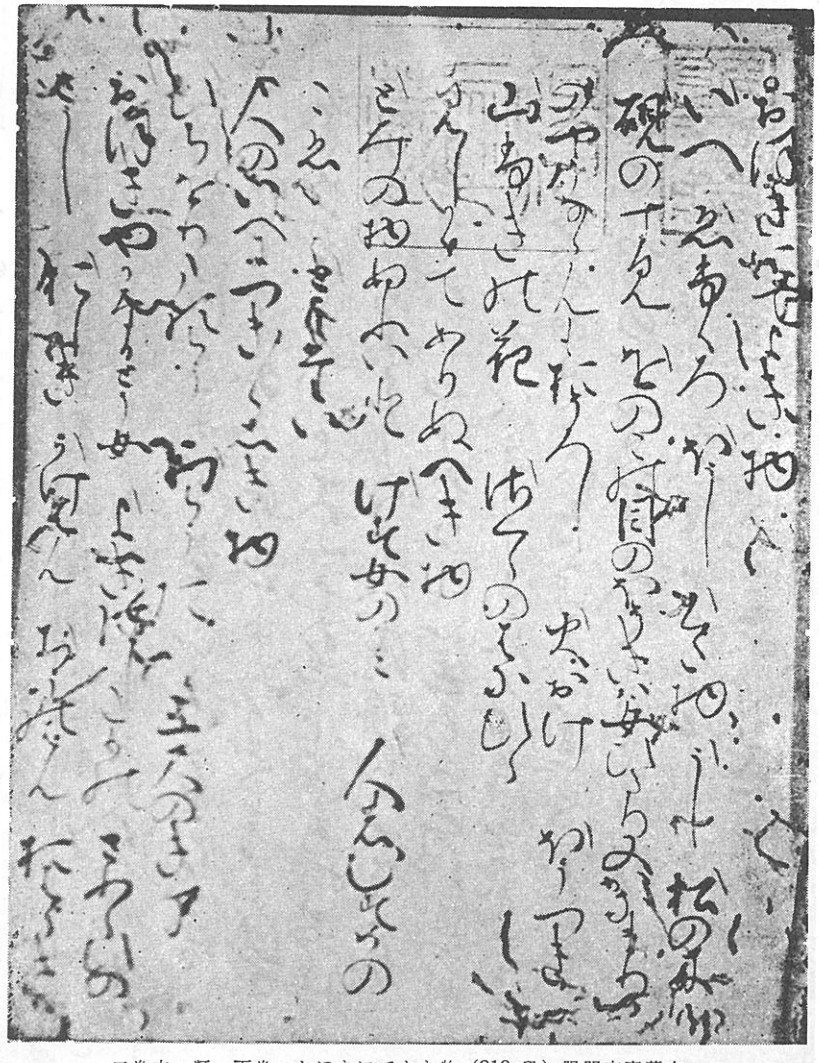

三巻本一類　下巻　おほきにてよき物（213段）陽明文庫蔵本

目次

一　春は曙……一五
二　比は……一五
三　正月一日は……一五
四　同じことなれども聞き耳ことなるもの……一八
五　思はん子を法師になしたらんこそ……一八
六　大進生昌が家に……一九
七　うへにさぶらふ御猫は……二三
八　正月一日、三月三日は……二四
九　よろこび奏するこそ……二五
＊　今内裏の東をば……二五
＊　定澄僧都に往なし……二五
一〇　山は……二五
一一　市は……二五
一二　峯は……二六
一三　原は……二六
一四　淵は……二六
一五　海は……二六
一六　みささぎは……二六
一七　わたりは……二六
一八　たちは……二六
一九　家は……二六
二〇　清涼殿の丑寅の隅の……二七
＊　生ひ先なく、まめやかにえせざいはひなど見てゐたらん人は……二一
二一　すさまじきもの……二一
二二　たゆまるるもの……二四
二三　人にあなづらるるもの……二四
二四　にくきもの……二四
二五　心ときめきするもの……二七
二六　過ぎにしかた恋しきもの……二七
二七　心ゆくもの……二八
二八　檳榔毛は……二八
二九　説経の講師は……二九
三〇　菩提といふ寺に……四〇

三一　小白河といふ所は……四一
三二　七月ばかりいみじう暑ければ……四四
三三　木の花は……四六
三四　池は……四七
三五　せちは……四八
三六　花の木ならぬは……四九
三七　鳥は……五一
三八　あてなるもの……五三
三九　虫は……五三
四〇　七月ばかりに、風いたう吹きて……五三
四一　にげなきもの……五三
四二　細殿に人あまた、ゐて……五四
四三　主殿司こそ……五四
四四　をのこは、また随身こそ……五五
四五　職の御曹司の西面の立蔀のもとにて……五五
四六　馬は……五七
四七　牛は……五八
四八　猫は……五八
四九　雑色・随身は……五八
五〇　小舎人童……五八
五一　牛飼は……五八
五二　殿上の名対面こそ……五八
五三　若くよろしき男の……五九
五四　若き人・ちごどもなどは……五九
五五　よき家の中門あけて……五九
五六　滝は……六〇
五七　河は……六〇
五八　暁に帰らん人は……六〇
五九　橋は……六一
六〇　里は……六一
六一　草は……六二
六二　草の花は……六二
六三　集は……六三
六四　歌の題は……六四
六五　おほつかなきもの……六四
六六　たとしへなきもの……六四
＊　夜鳥どものゐて……六四
六七　しのびたる所にありては……六四
六八　懸想人にて来たるは……六五
六九　ありがたきもの……六五

七〇　内裏の局・細殿いみじうをかし……六六
＊　まいて、臨時の祭の調楽などは……六七
七一　職の御曹司におはしますころ、木立など……六八
七二　あぢきなきもの……六八
七三　心地よげなるもの……六九
七四　御仏名のまたの日……六九
七五　頭の中将の、すずろなるそら言を聞きて……六九
七六　返る年の二月二十余日……七二
七七　里にまかでたるに……七五
七八　もののあはれ知らせ顔なるもの……七六
七九　さて、その左衛門の陣などに行きて後……七六
八〇　職の御曹司におはしますころ、西の廂に……七八
八一　めでたきもの……八六
八二　なまめかしきもの……八七
八三　宮の五節出ださせたまふに……八八
八四　内裏は、五節のころこそ……八〇
八五　無名といふ琵琶の御琴を……九一
八六　上の御局の御簾の前にて……九二
八七　ねたきもの……九二
八八　かたはらいたきもの……九三
八九　あさましきもの……九四
九〇　口をしきもの……九四
九一　五月の御精進のほど……九五
九二　職におはしますころ……一〇〇
九三　御かたがた、君達、上人など……一〇一
九四　中納言まゐりたまひて……一〇一
九五　雨のうちはへ降るころ……一〇三
九六　淑景舎、東宮にまゐりたまふほどの事など……一〇三
九七　殿上より、梅のみな散りたる枝を……一〇八
九八　二月つごもりごろに……一〇八
九九　はるかなるもの……一〇九
一〇〇　方弘は……一〇九
一〇一　見苦しきもの……一一〇
一〇二　言ひにくきもの……一一一
一〇三　関は……一一一
一〇四　森は……一一一
一〇五　原は……一一一
一〇六　四月のつごもりがたに、初瀬に詣でて……一一一
一〇七　常よりことにきこゆるもの……一一三
一〇八　絵にかき劣りするもの……一一三

一〇九　かきまさりするもの……一一三
一一〇　冬は……一一三
一一一　あはれなるもの……一一三
一一二　正月に寺にこもりたるは……一一四
一一三　いみじう心づきなきもの……一一七
一一四　わびしげに見ゆるもの……一一八
一一五　暑げなるもの……一一八
一一六　恥づかしきもの……一一八
一一七　むとくなるもの……一一九
一一八　修法は……一二〇
一一九　はしたなきもの……一二〇
＊　八幡の行幸のかへらせたまふに……一二〇
一二〇　関白殿、黒戸より出でさせたまふとて……一二一
一二一　九月ばかり、夜一夜、降り明かしつる雨の……一二二
一二二　七日の日の若菜を……一二三
一二三　二月、官の司に……一二三
一二四　頭の弁の御もとより……一二三
一二五　などて官、得はじめたる六位の笏に……一二四
一二六　故殿の御ために……一二五
一二七　頭の弁の、職にまゐりたまひて……一二六
一二八　五月ばかり、月もなういと暗きに……一二七
一二九　円融院の御はての年……一二九
一三〇　つれづれなるもの……一三一
一三一　つれづれ慰むもの……一三一
一三二　とりどころなきもの……一三一
一三三　なほめでたきこと……一三一
一三四　殿などのおはしまさで後……一三四
一三五　正月十余日のほど、空いと黒う……一三七
一三六　清げなる男の、雙六を……一三八
一三七　碁を、やむごとなき人のうつとて……一三八
一三八　おそろしげなるもの……一三八
一三九　清しと見ゆるもの……一三八
一四〇　いやしげなるもの……一三八
一四一　胸つぶるるもの……一三九
一四二　うつくしきもの……一三九
一四三　人ばへするもの……一四〇
一四四　名おそろしきもの……一四〇
一四五　見るにことなることなきものの文字に書きてことごとしきもの……一四一
一四六　むつかしげなるもの……一四一

一四七　えせもののところ得るをり……一四一
一四八　苦しげなるもの……一四一
一四九　うらやましげなるもの……一四一
一五〇　とくゆかしきもの……一四三
一五一　心もとなきもの……一四四
一五二　故殿の御服のころ……一四五
＊　宰相の中将斉信・宣方の中将・道方の少納言などまゐりたまへるに……一四六
＊　弘徽殿とは閑院の……一五〇
一五三　昔おぼえて不用なるもの……一五〇
一五四　たのもしげなきもの……一五一
一五五　読経は……一五一
一五六　近うて遠きもの……一五一
一五七　遠くて近きもの……一五一
一五八　井は……一五一
一五九　野は……一五二
一六〇　上達部は……一五二
一六一　君達は……一五二
一六二　〔受領は〕……一五三
一六三　権の守は……一五三
一六四　大夫は……一五三
一六五　法師は……一五三
一六六　女は……一五三
一六七　六位の蔵人などは……一五三
一六八　女の一人住む所は……一五三
一六九　宮仕人の里なども……一五三
一七〇　ある所に何の君とか言ひける人のもとに……一五五
一七一　雪のいと高うはあらで、うすらかに降りたるなどは……一五五
一七二　村上の前帝の御時に……一五六
一七三　御形の宣旨の……一五七
一七四　宮にはじめてまゐりたるころ……一五七
一七五　したり顔なるもの……一六一
一七六　位こそ、なほめでたきものはあれ……一六二
一七七　かしこきものは乳母の男こそあれ……一六二
一七八　病は……一六三
＊　十八九ばかりなる人の髪いとうるはしくて……一六三
一七九　すきずきしくて独住みする人の……一六四
一八〇　いみじう暑き昼なかに……一六四
一八一　南ならずは、東の廂の板のかげ見ゆばか

りなるに……一六五
一八二　大路近なるところにて聞けば……一六五
一八三　ふと心おとりとかするものは……一六六
一八四　宮仕人のもとに来などする男の……一六七
一八五　風は……一六七
＊　野分のまたの日こそ……一六七
一八六　心にくきもの……一六八
一八七　島は……一七一
一八八　浜は……一七一
一八九　浦は……一七一
一九〇　森は……一七一
一九一　寺は……一七一
一九二　経は……一七一
一九三　仏は……一七二
一九四　書は……一七二
一九五　物語は……一七二
一九六　陀羅尼は……一七二
一九七　あそびは……一七三
一九八　あそびわざは……一七三
一九九　舞は……一七三
二〇〇　弾くものは……一七三
二〇一　笛は……一七三
二〇二　見ものは……一七四
＊　賀茂の臨時の祭……一七四
二〇三　五月ばかりなどに山里にありく……一七七
二〇四　いみじう暑きころ……一七七
二〇五　五月四日の夕つかた……一七七
二〇六　賀茂へまゐる道に……一七七
二〇七　八月晦日、太秦にまうづとて……一七八
二〇八　九月二十日あまりのほど……一七八
二〇九　清水などにまゐりて……一七八
二一〇　五月の菖蒲の……一七九
二一一　よくたきしめたる薫物の……一七九
二一二　月のいと明かきに……一七九
二一三　大きにてよきもの……一七九
二一四　短くてありぬべきもの……一七九
二一五　人の家につきづきしきもの……一七九
二一六　物へ行く道に……一八〇
二一七　よろづの車よりも、わびしげなる車に……一八〇
二一八　細殿に便なき人なん暁に……一八一
二一九　三条の宮におはしますころ……一八二
二二〇　御乳母の大輔の命婦……一八二
二二一　清水にこもりたりしに……一八三
二二二　むまやは……一八三
二二三　社は……一八三
二二四　一条の院をば今内裏とぞいふ……一八六
二二五　身をかへて天人などはかうやあらむと見ゆるものは……一八七
二二六　雪高う降りていまもなほ降るに……一八七
二二七　細殿の遣戸をいととうおしあけたれば……一八七
二二八　岡は……一八八
二二九　降るものは……一八八
二三〇　日は……一八八
二三一　月は……一八八
二三二　星は……一八八
二三三　雲は……一八九
二三四　さわがしきもの……一八九
二三五　ないがしろなるもの……一八九
二三六　ことばなめげなるもの……一八九
二三七　さかしきもの……一八九
二三八　ただ過ぎに過ぐるもの……一九〇
二三九　ことに人に知られぬもの……一九〇
二四〇　文詞なめき人こそ……一九〇
二四一　いみじうきたなきもの……一九一
二四二　せめておそろしきもの……一九一
二四三　たのもしきもの……一九一
二四四　いみじうしたてて婿取りたるに……一九一
二四五　世のなかになほいと心憂きものは……一九二
二四六　男こそなほいとありがたく……一九三
二四七　よろづのことよりも情あるこそ……一九三
二四八　人のうへ言ふを腹立つ人こそ……一九四
二四九　人の顔にとりわきてよしと見ゆる所は……一九四
二五〇　こだいの人の、指貫着たるこそ……一九五
二五一　十月十余日の月いと明かきに……一九五
二五二　成信の中将こそ……一九五
二五三　大蔵卿ばかり……一九五
二五四　うれしきもの……一九六
二五五　御前にて人々とも、また、物仰せらるるついでなどにも……一九七
二五六　関白殿、二月二十一日に法興院の積善寺

という御堂にて……一九九
二五七　たふときこと……二二二
二五八　歌は……二二二
二五九　指貫は……二二二
二六〇　狩衣は……二二三
二六一　単衣は……二二三
二六二　下襲は……二二三
二六三　扇の骨は……二二三
二六四　檜扇は……二二三
二六五　神は……二二三
二六六　崎は……二二三
二六七　屋は……二二三
二六八　時奏する……二二四
二六九　日のうららうらとある昼つかた……二二四
二七〇　成信の中将は、入道兵部卿の宮の御子にて……二二四
二七一　常に文おこする人の……二二七
二七二　きらきらしきもの……二二八
二七三　神のいたう鳴るをりに……二二九
二七四　坤元録の御屏風こそ……二二九
二七五　節分違へなどして……二二九
二七六　雪のいと高う降りたるを、例ならず……二二九
二七七　陰陽師のもとなる小童こそ……二三〇
二七八　三月ばかり、もの忌しにとて……二三〇
二七九　十二月二十四日、宮の御仏名の……二三一
二八〇　宮仕へする人々の、出で集まりて……二三二
二八一　見ならひするもの……二三二
二八二　うちとくまじきもの……二三三
二八三　右衛門の尉なりける者の……二三四
二八四　小原の殿の御母上とこそは……二三五
二八五　また業平の中将のもとに……二三五
二八六　をかしと思ふ歌を……二三五
二八七　よろしき男を、下衆女などのほめて……二三五
二八八　左右の衛門の尉を判官といふ名つけて……二三五
二八九　大納言殿まゐりたまひて……二三六
二九〇　僧都の御乳母のままなど……二三七
二九一　男は女親なくなりて、男親の一人ある……二三八
二九二　ある女房の……二三八
二九三　便なきところにて……二三九
二九四　まことにや、やがては下ると……二三九
一本
一　夜まさりするもの……二三〇
二　日影におとるもの……二三〇
三　聞きにくきもの……二三〇
四　文字に書きてあるやうあらめど心得ぬもの……二三〇
五　下の心かまへてわろくて清げに見ゆるもの……二三〇
六　女の上着は……二三一
七　唐衣は……二三一
八　裳は……二三一
九　汗衫は……二三一
一〇　織物は……二三一
一一　あやの紋は……二三一
一二　薄様色紙は……二三一
一三　硯の箱は……二三一
一四　筆は……二三一
一五　墨は……二三一
一六　貝は……二三一
一七　櫛の箱は……二三二
一八　鏡は……二三二
一九　蒔絵は……二三二
二〇　火桶は……二三二
二一　畳は……二三二
二二　檳榔毛は……二三二
二三　松の木立ち高き所の……二三二
二四　宮仕へ所は……二三四
二五　荒れたる家の蓬深く……二三四
二六　初瀬にまうでて、局に居たりしに……二三四
二七　女房のまゐりまかでには……二三五
二九五　この草子、目に見え、心に思ふことを……二三六
二九六　左中将……二三六

一　清少納言集……二四三
二　清少納言集（異本）……二四七
三　枕草子に含まれる和歌連歌一覧……二五二
四　私家集などによる増補清少納言和歌……二五五
五　関係系図……二七七
六　人名一覧……二六四
七　枕草子年表……二七一
枕草子関係絵図

○春は曙―中国の玉台新詠集、大江維時の千載佳句などに「春暁」という詩題があり、それらと同類とすべきであろう。あけぼのは類聚名義抄には「未明」「曈」「曨」の漢字にこの訓があり、色葉字類抄には「凌晨」「会明」「平明」にこのよみがある。清少納言のこの「春は曙」という成語は、大斎院御集の26、27番歌に中将、中務の両人によって、「秋のねざめ」と「春のあけぼの」との優劣が論じあわれていて、その受容のあとが見え、又、堀河次郎百首、六百番歌合には歌題にとりあげられている。

○三つ四つ、二つ三つ―三巻本、前田本、堺本一類がこの本文で、「三つ四つ二つ」という本文は、能因本、三巻本の抜書本、堺本二類である。鑑賞については、西尾実氏の「文学」昭和十年十一月号参照。

○冬はつとめて―この一項は、作者の宮廷生活における場がはっきりと示されて、春、夏、秋の如く自然のみをもって構成されているものと趣を異にする。

○比は―一年ながらをかしという文法ではあるが、それでは、列挙の意味がないことになる。やはり列挙の月はとくに主点があるのであろう。二月、六月は諸本とも省略で、さらに、十月を欠くもの「三巻本、能因本」、十二月を欠くもの「堺本、前田本」である。

○正月一日―公事根源に「四方拝（ヘイ）という事は元正寅の時にすべらぎ属星（ゾクシャウ）を唱へ、天地四方山陵を拝し給て年災をも払ひ、宝祚をも祈申さるゝ儀にて侍にや」とある。

○心ことに―「つくろふ」にかかる。姿、かたち、心の三つが同格ではない。

一　段―三　段

一　春は曙。やうやう白くなり行く山際、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり。闇もなほ螢の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。

秋は夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏の寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして炭もてわたるも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も白き灰がちになりてわろし。

二　比は　正月、三月、四月、五月、七、八、九月、十一、二月、すべて折につけつつ一年ながらをかし。

三　正月一日は、まいて空の気色もうらうらと、めづらしう霞みこめたるに、世にありとある人は、みな姿、かたち、心ことにつくろひ、君をもわれをも祝ひなどしたるさま、ことにをかし。